（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	帯谷知可
論文題目	中央アジアにおけるモダニティの追求 ―ウズベキスタンにおけるイスラーム・ヴェール問題の歴史的展開と現代―		

（論文内容の要旨）

本論文は、中央アジア・イスラーム諸国の中でも重要な位置を占めるウズベキスタンをめぐって、特に「イスラーム・ヴェール問題」を焦点として、ウズベキスタンにおける宗教・社会的な変容を考察したものである。

第1章「モダニティ追求の磁場としてのウズベキスタン」では、ウズベキスタンという「国民国家」がいかに成立したかを綿密に考証して、独自の「モダニティ」を追求する「磁場」としての対象地域の特性とそこに内包される歴史的な民族的問題群を明らかにしている。特に歴史上の英雄である「ティムール」の再評価と民族的英雄としての表象に焦点を当てて、独立後のナショナリズムがいかに表象されてきたかを論究している。

第2章「イスラーム・ヴェール問題と中央アジア」では、ウズベキスタンにおける女性の装いといわゆる「ヴェール」の問題を民族誌的な観点から実証的に考察している。特に、19世紀末～20世紀初頭のロシア領トルキスタンのサルト人女性に焦点を当て、彼らの服装の変化とその意義を検討している。

第3章「帝政ロシアにおける『ムスリム女性』と『ヴェール』をめぐる言説」では、帝政ロシア期に西欧とは異なる形で展開した「女性解放運動」、それとむすびついた「ムスリム女性」像や「ヴェール」問題がどのようなものであったかを考察している。特に、女性の権利や男女平等論をめぐって、ロシア・オリエンタリズムとムスリム側の知識人の議論と言説を詳細に再構成し、そこに内在しているバイアスを社会・政治的な文脈と結びつけながら分析している。

第4章「ソ連期ウズベキスタンにおける女性とイスラーム・ヴェールをめぐる言説と表象」では、ソ連期ウズベキスタンでイスラームとヴェールを「後進的」「抑圧的」とみなす言説と表象がいかに展開されたかを、「近代」創出のための「前近代」創出という論点と共に、多くの史資料（写真・絵画を含む）から多重的な二元論の形成として論究している。ソ連は「ソヴィエト的近代」をウズベキスタンに強制的に押しつけようとしたが、それに対して激しい抵抗も生じたこと、その一方で、第2次世界大戦への動員で多くの男性が前線に送られたために、女性の経済的・社会的自立が実際的に進んだことも明らかにされている。

第5章「現代ウズベキスタンにおける『ヴェールの政治学』：ポスト社会主義、権威主義、イスラーム復興の交錯」では、現代ウズベキスタンで「ヴェールの政治

学」が展開している実相を、脱ソ連期・ポストソ連期における権威主義体制、イスラーム復興の問題などと結びつけながら検討し、女性たちの新しい自己表象としてのヴェールである「ヒジョブ」とそれをめぐる新たなヴェール言説の登場を、現地調査に基づいて考察している。

結論では、ヨーロッパにおけるヴェール問題との差異を明らかにした上で、ウズベキスタンにおけるイスラームとヴェールをめぐる諸問題が、独自のモダニティと独自の女性解放の追求が交錯する場としてのウズベキスタン社会の中で1世紀以上にわたって出現し続け、独立後の今日でも、宗教的・社会的・政治的な変容に対応しながら女性たちのアイデンティティや具体的な服装規範をめぐる思想や言説の対立関係が継続していると総括している。